

# 説経らしい語り口の語法

## A Study Of Usage Of “Sekkyo-Bushi”

柏原 卓

Suguru KASHIWABARA

2010年11月2日受理

**要旨：**浄瑠璃風に変化する以前の「古説経」の語り口について考察する。柏原(2004)では「かるかや」「しんとく丸」「をくり」の3作品をとりあげて(1)「場面別」「汎用」に分けることを提案し、(2)「汎用」の特徴について作品別状況を検討し、とりわけ「地の文末」「終助詞」「引用形式」に焦点を当てた。その結果、「地の文末」や「終助詞」の作品差、引用助詞「と」がない会話文の末尾に依頼表現・呼称・終助詞が多用される、などの知見を得た。本稿では、上記3作品に「さんせう太夫」も加えて、説経らしい語り口とはいかなるものかを、「場面別」の概念をより明瞭にしつつ、語り本と読み本(正本と草子)の差にも留意して考察する。

- ・摂州東成郡生玉庄大坂 天下一説経与七郎  
以正本開 さんせう太夫  
(寛永末頃 西洞院通長者町板)
- ・天下無双佐渡七太夫正本せつきやうしんとく丸(正保五年三月 二条通九兵衛刊)
- ・をくり(寛永後期～明暦 宮内庁蔵御物絵巻)
- [対照] ・〔せつきやうかるかや〕(室町時代末 絵入大型写本)  
(草子「さんせう太夫物語」上巻は新発見で『説経正本集』には無く、岩波『古浄瑠璃説経集』による)

### 1. はじめに

『説経節』(平凡社東洋文庫、1973年)『説経集』(新潮日本古典集成、1977年)によって詳しい解説と注釈つきで説経が広く世間の目に触れたが、その後『古浄瑠璃 説経集』(岩波新日本古典文学大系、1999年)で、古浄瑠璃と説経を併せ読める便宜が与えられるとともに、解説も新しくなり、注釈も浄瑠璃や舞や室町物語を引く項目が増えて大きく進歩した。ただ文法説明においては不統一や改良すべき点があるように見受ける。

また、新大系『古浄瑠璃 説経集』では「しんとく丸」が省かれたほか、「かるかや」の底本を室町末絵入写本に変更したり「さんせう太夫」の欠文補充を新出の草子で行なうなど採択本文に変化がある。

これらの先行研究を踏まえて本稿では「古説経」の語り口の特徴について考察するが、「語り口」と言う語を本稿では「ジャンル文体」の意味で用いることにする。従来指摘されている文体特徴を整理しつつ、私自身の調査に基づく特徴の指摘もしたい。また、前述した先行研究における採択本文の違いと文体差についてや、語法の説明についての若干の意見も付記することにする(4. 補説)。

調査に使用する本文は原則として、横山重『説経正本集』(角川書店、3冊)所収の次の本による。

[主] ・せつきやうかるかや (寛永八年卯月 しやうりや喜衛門刊)

### 2. 「語り口」序説

#### 2-1 先行研究

説経独特の語句や語り口、太夫たちの語り口の統一性、ということが指摘されている。その成立事情や特徴も諸氏によっていろいろと指摘されている。

- (1)室木弥太郎(1970,1981)は、写本「かるかや」は「てに」の用法が20数か所あり、終助詞「の」「よ」「や」、「お…ある」、「出家にないて」(サ行イ音便)、「もどらい」などの用法、「あらいたはしや」の多用等、説経独特のものがあるとしている。(p.299)  
また、「語り口」という語を表現感情・態度の側面からも使用している。(p.292)(注1)
- (2)荒木繁(1973)は、「冒頭の本地語り」「他の語り物には見られない卑俗な日常語や方言、訛語の類」「敬語の過剰な多用」「道行の独特のスタイル」「古説経特有の『…てに』の語法」「『いたわしや』『あらいたわしや』の頻用」を古説経の特徴としてあげる。(pp.311-313, p.320)
- (3)山本吉左右(1973)は、「口頭の構成法の口語り」によっている点を指摘。決まった台本でなく毎回その場で急速に物語が創造される。語りは大半が、一部をとりかえた句(開かれた決まり文句)も含めた「決まり文句」からなり、同一語句や類似語句や決まり文句は説経節正本の特徴だという。また口語りの単位

というほぼ七五調の一句が有ることの指摘、諺や大和言葉は文脈から独立して即興的に利用されるという指摘もある。(pp.340-361)

- (4)室木弥太郎(1977)では、解説で「『てに』の語法」(p.412)や「あらいたはしや」「流涕焦がれ泣きにける」(p.415)などに言及するとともに、頭注で説経節のさまざまな慣用句を数多く指摘している。
- (5)信多純一(1999)は、「…てに」について、古説経に多く現れるが、「こあつもり」(1645)「ふきあげひでひら入」(1651)と古い浄瑠璃にも見え、これは位相語であり古い俗語であろうと考えていたが、荒木繁(1998、岩波講座『歌舞伎・文楽』7巻)も「地域方言としてとらえるより、ささら説経といった人々の間の位相語であり…」と記したことに賛同している。(pp.570-571)

また、信多純一・阪口弘之校注『古浄瑠璃 説経集』(1999)は、「説経の常套句」等と明記した頭注もあるが、説経の他作品や浄瑠璃などの語り物の用例を引くことで、語り物的な共通性があることを示している場合が多々ある。

(注1)

説経の魅力は何かと聞かれるなら、強固な意志と漂泊の抒情とあってよいのではないか。儚の哀調にたすけられるものであるが、例えば語り口の「口説き」の中にその感情がよく表出されている。「口説き」は舞を初め中世語り物に共通する特徴であるが、説経には物乞いのようなしつこさがある。子供のおねだりのように縛りつくものがある。そこに日本人が畏怖と郷愁を感じる、小さくはあるが深い世界があると思う。(室木弥太郎『増訂 語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』p.292)

## 2-2 語り口の要素たる慣用句の二大別：

### 「場面別」「汎用」

古説経の語り口を形成している要素として、諸氏の上げられた「慣用句」ないし「類型表現」が大きな位置を占める。これを「場面別」と「汎用」に分けることが出来る。室木弥太郎の頭注で「慣用句」「説経独特」等と指摘した例を幾つか列挙して説明する。

#### A [場面別]

「冒頭の本地語り」「道行」「誓文」「申し子の祈誓」「手紙の謎言葉(大和言葉)の解説」をはじめ「懐妊から出産へ」「成長の早さ」「空涙をなじる」「ことわざ」など大小いろいろな場面の類型的表現。

- ・ただ今、説きたて広め申し候本地は一説経独特の序詞。…(11頁)
- ・ころはいつなるらん一慣用句。「ころはいつぞのころなるらん。弥生なかばのことなるに」(奈良

絵本『十二段草子』(11頁)

- ・「…をはや過ぎて」「…はあれかとよ」「先をいづくとお問ひある」は道行の慣用句。(16頁)
- ・きのふけふとは思へども一時のたつことの早きをいう慣用句。(28頁)
- ・これは重氏殿の物語さておき申し、殊に哀れをとどめたは、…御台所にて、殊更哀れをとどめたよ。—「殊更哀れをとどめたよ」まで、説経独特で、話題を変える場合の冒頭の語り。(30頁)
- ・流涕焦がれてお泣きある。—慣用句。涙を流し、ひどく悲しんで泣く様。(30頁)

#### B [汎用]

場面を問わず現れる。「『てに』の語法」「『いたわしや』『あらいたわしや』の使用」「卑俗な方言訛語」「敬語の過剰」などが含まれる。

- ・「いかに…に申すべし」は慣用句。「いかに」は呼び掛け。(12頁)
- ・不足かの一不満ですか。「の」は後に出る「に」や「や」「よ」とともに説経に多い間投助詞。(12頁)
- ・てに—「…てに」は説経独特の語法。「に」は現代語の「ね」に近い間投助詞。(引用者注—間投助詞ではなく接続助詞)(14頁)
- ・「お+動詞連用形+ある」は独特の慣用語法。(14頁)

「汎用」は、諸種の語法の類が多数を占め、文体特徴と深い関係がある。たとえば助詞・助動詞が文語か口語か、活用形は文語式か口語式かなど文体印象に大きく影響する。

## 2-3 「場面別」「汎用」の類型表現と全体の語り口

まず「汎用」が終始「説経らしい」文体印象を形成し、途中に「場面別」が出現することで、「いかにも説経らしい」という際立った印象が付加される。しかも「場面別」は、本地語り、申し子、道行、誓文など「説経によくある場面」として説経作品の枠組みを形成するので、「筋書きでの説経らしさ」(広い意味での「語り口」の一部)を生む。

以上の密接な構造にかんがみて、下記に調査考察するように「汎用」に注目することは「場面別」に劣らず価値のあることである。ただし、「場面別」類型表現には「本地語りの冒頭」「道行」「大誓文」など分量の有る大きなものと、「時の流れの早さ」(昨日今日とは思へども)「悲しんで泣く」(流涕焦がれてお泣きある)など短い小さなものがあり、短いものでは内部に「汎用」慣用句を分析することは事実上できない。

### 3. 「語り口」各説

#### 3-1 地の文末

長い会話文がはさまることも多いが、地の文末によって文体基調が「卑俗な日常語」か硬い文語かがある程度はかってみることができる。

「せつきやうかるかや上」(『説経正本集』10頁半のうち「道行」「大誓文」部分約2頁を除く8頁半)、「さんせう太夫上」(『同』8頁と少し)「せつきやうしんとく丸上」(『同』8頁分)、「をくり」六、九(『同』五頁、五頁)文末一覧を示す。適宜漢字をあてる。

##### (1)せつきやうかるかや上(「道行」「大誓文」部分を除く)

- ・お連用形ある お建てある、お触れある、お移りある、お泣きある(2例)、お止めある、お書きある(5例)、お着きある、を伏しある、お語りある、お上がりある、お答へある、お解きある、お付けある
- ・御意ある
- ・御ちやうなり(3例)、おほせなり、となり(4例)、のたまふなり
- ・諒承なり、忍び出でさせたまふなり
- ・送らるる
- ・感じたまふ、もだへたまふ
- ・申す
- ・御供申す
- ・巡る、剃りこぼす、巡ったり
- ・なり、ごとくなり(2例)
- ・限りも無し、無かりけり
- ・跡ばかり
- ・御座あるよ、(哀れを)とどめたよ

##### (2)さんせう太夫上

- ・お連用形ある お戻りある(4例)、お借りある、お申しある(4例)、お下りある(2例)、おなりある、お泣きある、お問ひある、お出しある(2例)、お運びある、お待ちある
- ・伏しておはします、追うておはします、おはします(2例)
- ・おぼしめす
- ・戻らるる
- ・まいらする
- ・なり 御ちやう也、給ふ也、申す也、(～と)ばかり也(2例)、合点なり、ならぬ也、道理也
- ・動詞現在形 申す(2例)、押し出だす、見ゆる、取りかくる、値差す、口論する、行く、なる、泣きくらす、通る
- ・限りなし、無し
- ・とどめたり
- ・売ったりけり、
- ・急ぎける、たばかりける、聞こへける、責めにける

- ・あらいたはしや(3例)、恐ろしや
- ・あらいたはしやな(6例)
- ・寄らばこそ

##### (3)せつきやうしんとくまる上

- ・お連用形ある お下がり有、お籠もり有(2例)、お立ちある、お籠め有(2例)、お上がり有、お下向有(2例)お告げある、お解きある、おなりある、お伏しある、お問ひある、お笑いある
- ・お連用形なし お見へなし(2例)
- ・連用形ある 送りある、対面ある、評定ある、拝見ある
- ・(と)ある(2例)
- ・指されたもふ、おはします
- ・申、たてまつる(2例)、対面申(2例)
- ・申ける、帰りける、急ぎける、(と)聞こへける(3例)
- ・読み上たり(2例)、商のふたり
- ・なし(4例)、限りなし、良し、
- ・有り、也
- ・ありがたや、仲光や、取りたれや、おもしろや

##### (4-1)をくり六

- ・御定(ちやう)なり(4例)、御所望なり
- ・お連用形ある 御覧ある(2例)、お移りある、お問ひある(2例)、お直りある、お笑ひある
- ・教訓ある(2例)、所望ある、賞翫ある、お供ある、
- ・申さるゝ(2例)、並ばれたり、入れられたり、ほめられたり、好まれたり
- ・含めたまふ
- ・申すなり(2例)、申しけれ
- ・まいらする
- ・僉議なり、如くなり(4例)、ばかりなり、次第なり
- ・なし(2例)、わきまへず
- ・立つ、乗り下ろす、見えてあり
- ・まさるべし、らん、やらん
- ・もげにけり(2例)、立ったりけり、無かりけり、良かりけり、敬うたり
- ・鞭の秘書(3例)

##### (4-2)をくり九

- ・お連用形ある お泣きある、お着きある(2例)、おなりある、お問ひある
- ・おはします、ふすべたまふ
- ・申なり(3例)、申ける(2例)
- ・打ちける、始めける、無かりけり、(諸事の哀れを)とどめけり、待ち居たり
- ・立つ、呼ぶ、突き流す、吹きつくる、志す、買うて行く(2例)

・無し(2例)  
 ・いかでまさるべし  
 ・あらいたはしや、あらいたはしやな(3例)、恐ろしや、有様かな

以上の抽出から、共通点と相違点がいくつか指摘できる。

- ①4作品とも地の文の文末で「お～ある」敬語をよく使っている。そのため、舞、浄瑠璃、物語草子に比べてより日常語の印象がある。しかもこの調査で除外した「道行」に「先をいづくとお問ひある」「○○にお着きある」という表現が頻出する。
- ②断定「なり」過去・完了「たり」「けり」など文語の助動詞もかなり用いられている。しかし口語的な「お～ある」文末と、文中にも口語が活発に出てくる中で用いられるので、全体に完全に文語文の印象を与えるには遠い。「をくり六」で俗語「もげ(壊れ)」に文語「に・けり」を接続させた「もげにけり」などはそうした傾向を象徴する。
- ③「をくり六」「をくり九」を比べると、六では「漢語＋なり」「漢語＋ある」が多くて硬い感じがする。小栗が馬を乗りこなす勇壮な場面である。九ではそれがなく柔らかい。照手姫があやうく水漬けの処刑をのがれて漂着する苦難の場面である。主人公や場面によって文末、文体に差が出る。
- ④発語「あらいたはしや」「あらいたはしやな」は、「をくり九」では多用されるのに、「かるかや」「しんとく丸」の調査部分には出現せず(他の部分には多数ある)、「をくり六」にも出現しない。これも場面による。

### 3-2 終助詞

説経では終助詞が多く出現することによって相手に呼びかけたり強調する陳述が加わり、対話の口ぶりが生き生きと伝わってくる。以下の作品別終助詞一覧表は陳述の意味で終助詞を大別した。

「か・の」「か・なふ」「か・とよ」「か・や」は疑問反語「か」の意味が中核で、後の要素は相手への持ちかけを付加していると見て、「か」の類に撰した。サ変・二段・一段動詞の命令形につく「よ」と訛形「い」は活用形の一部と見てここには入れなかった。

せつきやうかるかや(全242例)

①疑問・反語	69例、28.5%
か	29例
かの	2例
かなふ	1例
かとよ	2例
かや	16例
ぞ	16例
や	3例

②詠嘆・呼びかけ	120例、49.5%
や	48例
やな	9例
やの	7例
よ	51例
かな	5例
③強調	34例、14.0%
ぞ	17例
ぞや	4例
ぞよ	8例
ぞとよ	4例
ぞかし	1例
④詠嘆	4例、1.6%
もの	3例
ものを	1例
⑤喚起	13例、5.3%
の	10例
なふ	3例
⑥禁止	2例、0.8%
な	1例
な～そ	1例

さんせう太夫(全231例)

①疑問・反語	70例、30.3%
か	40例
かや	10例
かよ	6例
ぞ	13例
や	1例
②詠嘆・呼びかけ	112例、48.4%
や	36例
やな	24例
かな	9例
やれ	1例
よ	35例
よな	4例
よの	3例
③強調	23例、9.9%
ぞ	16例
ぞかし	3例
ぞやれ	3例
ぞや	1例
④詠嘆	3例、1.3%
ものを	3例
⑤喚起	8例、3.4%
の	8例

⑥禁止	9例、3.8%
な	3例
いな	3例
な～そ	1例
そ	2例
⑦願望	6例、2.5%
かし	1例
ばや	5例

せつきやうしんとく丸(全168例)

①疑問・反語	44例、26.1%
か	19例
かや	15例
ぞ	10例
②詠嘆・呼びかけ	103例、61.3%
や	61例
やな	7例
よ	29例
よな	1例
かな	5例
③強調	15例、8.9%
ぞ	6例
ぞとよ	3例
とよ	1例
ぞや	5例
⑤喚起	1例、0.6%
のふ	1例
⑥禁止	5例、2.9%
な	4例
な～そ	1例

をくり(全307例)

①疑問・反語	71例、23.1%
か	36例
かの	12例
かや	6例
かよ	3例
かとよ	1例
ぞ	5例
そ	2例
ぞの	2例
ぞや	2例
ぞよ	2例
②詠嘆・呼びかけ	158例、51.4%
や	69例
やな	17例
やの	2例
やれ	1例

よ	47例
よさて	4例
よな	6例
よの	3例
かな	5例
かなや	2例
③強調	20例、6.5%
ぞ	15例
ぞかし	3例
ぞや	1例
かし	1例
④詠嘆	4例、1.3%
は	2例
ものを	2例
⑤喚起	48例、15.6%
の	48例
⑥禁止	3例、0.9%
そとよ	1例
な～そ	2例
⑦願望	3例、0.9%
かな	1例
かなの	2例

以上の表から次のようなことが分かる。

- ①「しんとく丸」は下巻末に欠丁があるためか、総数が少なめである。また「①疑問・反語」の語の種類が少ない(ただし使用は多い)。
  - ②「しんとく丸」は「②詠嘆・呼びかけ」が61.3%を占め、他の50%前後を大きく上回っている。
  - ③「をくり」は「⑤喚起」が15.6%を占め、「かるかや」5.3%、「さんせう太夫」3.4%、「しんとく丸」0.6%を大きく上回っている。
  - ④作品によって独自使用語がある。「さんせう太夫」の「ぞやれ」など。
- 上記②、③には次のような原因がある。
- a. 「しんとく丸」に「②詠嘆・呼びかけ」が多いのは、会話文で「御前の井垣古び見苦しや」「筆の立てどの気高さよ」など「や」「よ」をよく使うことと、地の文でも語り手が「有かたや、御ほぞんな」「ほとけのちかいあらたさよ」のように詠嘆的に批評したり、場面転換の「あらいたわしや」が多数あるからである。また道行にも語り手の詠嘆の「まだ夜は深きたか月や」が出現する。
  - b. 「をくり」に「⑤喚起」が多い原因の大部分は、会話文中で「の」を多用することによる。使用は照手姫が多いが他の人物にも見られる。まれに地の文にも、「お乳や乳母やの、下の水仕にいたるまで」のように出現した例がある。

### 3-3 引用形式

会話引用の形式は、語りの枠の一つであり、語りの足どりが影響を受け、文体印象にも関わる。

説経節の会話引用は大別して、引用の格助詞「と」が付くもの(A)と、「と」が付かないもの(B)に別れ、さらにいろいろな形式に別れる。

#### A 1 「 」と 類

- ・「 」と言う、「 」とある 等
- ・「 」とのごちやうなり、「 」となり 等
- ・「 」と+動詞(流涕こがれお泣きある 等)、「 」とて 等

#### A 2 「 」と「 」と

#### B 1 「 」「 」

#### B 2 「 」誰々このよしきこしめし 等

このような引用「と」の有無による二大別が、各作品でどれくらい使われているかの概況を示せば次の通りである。

「せつきやうかるかや」	
A 「 」と	69例(62.2%)
B 「 」	42例(37.8%)
「さんせう太夫」	
A 「 」と	112例(74.7%)
B 「 」	38例(25.3%)
「せつきやうしんとく丸」	
A 「 」と	99例(75.6%)
B 「 」	32例(24.4%)
「をくり」	
A 「 」と	152例(80%)
A' 「 」などと	2例(1.1%)
B 「 」	36例(18.9%)

引用助詞のないBの割合について各作品を比べると、「かるかや」が実数42例でも他作品を上回り、百分率37%でも「さんせう太夫」25.3%「しんとく丸」24.4%、「をくり」18.9%を大きく上回っている。

例えば「せつきやうかるかや」から冒頭の少し後の所を一例としてみよう。

しけうちさとりの人なれば…とおほしめし、「いかに御一もんに申へし、それかしにはいとまたまはれ御一もん、とんせいしゅきやう」とのたまふなり、御一もんはきこしめし、「はなみの御くわいのさしきにて、はなのちつたかふそくかの、おとまりあれやしけうちとの、しけうちこのよしきこしめし、「はなもしゆんきをちるならば、…つほうたはなのちるときは、らうしやうふちやうはまのまへなり」、御一もんはきこしめし、「六かこくか御ちきやうて…みのをきかたのないときにこそ、とんせいしゅきやうときいてあり」、しけうちこしめし、「… おもひきつたるしけうちを、とまるまい」ときよいあつて (せつきやうかるかや)

この場面に見られる会話引用の形式を略記すると次のようになる。

しけうち…とおほしめし「 」とのたまふなり  
御一もんはきこしめし「 」  
しけうちこのよしきこしめし「 」  
御一もんはきこしめし「 」  
しけうちこしめし「 」ときよいあつて

このように五つの会話引用のうち、第二から第四までは会話文の後は直接「〇〇きこしめし」に移っていて、受けて結ぶ形式がない。それによって移行が快速になりテンポが良くなっている。

#### 3-3-1 引用助詞のない会話末尾の特徴

引用格助詞の無いB形式の会話文末尾を少し詳しく見ておきたい。「かるかや」の42例でその特徴を概観してみる。

- ①依頼表現が多い。「教へて給はれ御ひじりさま」5例(お上人さま1例・母上さま1例・相弟子さま1例)、「教へて給はれ」、「敵教へて給はれや」、「影を隠いて給はれの(なふ)」、「仮名にももの御意ござあれ」、「お止まりあれや重氏殿」2例  
「拝うで通らい若侍」「母に孝行に当たらいよ」「急ぎ上らい石童丸」
- ②相手の呼称で止めるものが多い。「おひじりさま」5例、「重氏殿」2例、「若侍」「母御さま」「母上さま」「石童丸」「お上人さま」「相弟子さま」
- ③疑問や強調や呼びかけの終助詞で止めるものが多い。「国はいつこの人なるぞ」「衰ふるをも悲しまぬが出家ぞよ」「知恵第一の国なるよ」「共に尋ねに参らふなふ」  
このような相手への訴えかけを伴った結びになっている。話者の口ぶりがよく現れ、臨場感や次の文脈に向かう緊張が発生する。  
それをB 1(「 」「 」)によって繰り返し展開したり、B 2(「 」誰々このよしきこしめし 等)で受け手の反応を即座に明示して緊張を持続させている。

## 4. 補説

### 4-1 「場面別」補説

前述した「場面別」類型表現には大小いろいろある。長くて大きい「道行」「大誓文」のごときは、一定の形式を備えて話の中で独立性があり、語り口が周囲と異なる。説経の中での「道行」「大誓文」というジャンルのジャンル文体と称して大過ない。

[道行] (…心は物に狂はねど、姿を狂気にもてないて、「引けよ引けよ子供ども、物に狂うて見せうぞ」と、) 姫が涙は垂井の宿、美濃と近江の境なる、長競・二本杉・寝物語を引き過ぎて、高宮河原に鳴くひばり、姫を問ふかよ嬉しやな。御代は治まる武佐の宿、鏡の宿に車着く。(照手この由きこしめ

し…あの餓鬼阿弥に、心の闇がかき曇り、鏡の宿を見も分かず、) 姫がすそに露は浮かねど草津の宿、野路、篠原を引き過ぎて、三国一の瀬田の唐橋を「えいさらえい」と引き渡し、石山寺の夜の鐘、耳に聳えて殊勝なり。馬場・松本を引き過ぎて、お急ぎあれば程もなく、西近江に隠れなき、上り大津や関寺や、たま屋の門に車着く。(「をくり」十二～十三。適宜漢字に。)

「道行」の文体特徴は、まず道中の地名を列挙すること、次にはそれに修辞を施して興を盛り上げることである。引用箇所では、「姫が涙は垂る」と「垂井」や、地名「武佐」と「武者」の懸け言葉、「かき曇り」と「鏡(の宿)」の縁語、「～を引き過ぎて」の反復などの修辞が見える。また叙景表現や抒情表現の「姫が涙」「鳴くひばり」「姫を問ふかよ嬉しやな」「えいさらえいと引き渡し」「耳に聳えて殊勝なり」などが情趣を添える。これらは他の文脈にも皆無ではないが、道行には集中的に使用されて語り口の特徴となっている。

[大誓文]「謹上散供再拜再拜、上は梵天帝釈、下には四大天王、閻魔法王、五道の冥官、大じんに泰山府君、下界の地には、伊勢は神明天正太神、外宮が四十末社、内宮が八十末社、両宮合て百二十末社の御神、只今勸請申奉る。熊野には新宮くわう宮、那智には飛龍権現、神の倉には十蔵権現、…出雲の国の大社、神の父は佐陀の宮、神の母が田中の御前、山の神十五王、いはんや梵天、樹玉。屋の内に地神荒神、三方荒神、八大荒神、三十六社の竈、七十二社の宅の御神に至る迄、皆悉く誓文に立申。忝くも神の数、九万八千七社の御神、仏の数は一万三千余仏也。此仏神の御罰を被るべし。童においては知らぬなり。」(「さんせう太夫」中)

「大誓文」は多数の神仏の名を列挙した上で、誓約に違反すればこれら神仏の罰を甘受すると誓う内容である。したがって文体特徴として、まず神仏の名を数多く上げ、それを引き出すのに所在などを添えること、「謹上散供再拜再拜」のような発語と、末尾に「此仏神の御罰を被るべし。童においては知らぬなり。」のような罰を受ける覚悟と、誓う内容が来る。なお、説経の徒の間で口承される間に神仏名が著しく訛って原形を知りがなくなった物もあるが、こうした訛った印象も文体特徴と言うことができる。このように「大誓文」は周囲と異なる語り口を備えている。

以上「道行」「大誓文」という場面の語り口を検討した。先には「汎用」に対して大まかに「場面別」としたが、一定の形式を備えて話の中で独立している長くて大きい類型にはいろいろなものがあるので、それぞれに「語り口」を記述する必要があることだけ述べて今後の課題としたい。もちろん、さほど長くない類型も同様にできるだけ記述するべきであろう。

#### 4-2 草子「さんせう太夫物語」の使用について

諸注釈書が底本としている与七郎正本「さんせう太夫」は上巻冒頭に欠落があるので、『説経節』『説経集』では佐渡七太夫正本「せつきやうさんせう太夫」で補ったが、『古浄瑠璃 説経集』では上巻が新発見された草子「さんせう太夫物語」で補った。内容が近いという理由である。その点は従うべきだが、「語り口」の面では、草子は正本を読み物にした読み本と見られ、地の文が文語調になり会話文も多少その傾向が有る点に注意が必要である。

該当318頁から323頁2行までのうち、始めの2頁ほど(320頁1行まで)で「地の文末」「会話文の文末」を順に拾うと次のようである。

聞こえける。なのめならず。懺奏にや。いたはしや。限りなし。人もなし。送らせ給ふ。矢の如し。成にける。  
温むる。「何と申。」問ひ給ふ。「燕とも申也。」「着婆とも申なり」「鳥ぞかし。」「父鳥よ。」「母鳥よ。」「あの鳥の子供。」教へ給ふ。「不思議や。」「持つものを。」「なきやらん。」「ならせ給ふたか。」「何時が忌日ぞ。」「命日ぞ。」「申べし。」

一見して、文語文法を基調としている。文体は文末だけでは決まらないが、やはり文語調の印象が生じることは否定できず、正本の語り口とは差がある。

#### 4-3 語法の注釈に対して

岩波新大系『古浄瑠璃 説経集』について「文法説明においては不統一や改良すべき点があるように見受けられる」と記したが、語り口と無関係ではないので、若干の例を挙げる。

(1)てに

「てに」の語法は、古説経の目印とされる語法であり、由来を勢力のあった伊勢の説経の徒の方言に求める説があったが、前引(2-1 先行研究(5))の荒木繁(1998)や信多純一(1999)のように、方言と言うより説経の人々の位相語とか古い俗語と考えられるようになった。この語法の注が次のようになっている。

- ・「をぐり」p.186注22 接続助詞。当時の庶民の言葉。初期の古浄瑠璃、古説経に現れる。
- ・「かるかや」p.253注16 説経特有の口吻。
- ・「さんせう太夫」p.328注5 伊勢言葉に関係あるという。
- ・「さんせう太夫」p.339注10 草子本では全箇所、別表現。
- ・「さんせう太夫」p.365注8 説経固有の語法。まず「をぐり」注は接続助詞とするが、「さんせう太夫」p.328注は「伊勢言葉に関係あるという」とあり、従来の伊勢方言説や「に」間投助詞説を払しょくできていない。柏原(1988)で説いたように、接続

助詞「て」と接続助詞「に」の連語と解して問題ない。関西弁の「そやよってに(そうだから)」の「てに」と同じ語法である。

(2)あつとに

・「をぐり」p.243注8 「に」は間投助詞。(施注箇所：横山「あつ」とに肝をつぶし)

柏原(1988)で検討した。「てに」の「に」間投助詞が否定される以上、間投助詞と考えにくい。「あつとばかりに」の略で「に」は格助詞か断定助動詞連用形と考えた。柏原(1988)p.4参照。

(3)口故に熱い目をしてよいか

・「さんせう太夫」p.347注9 言葉ゆえに熱い目にあつてよい気味か、の意か。(施注箇所：大夫此由御覧じて「さても汝等は口故に熱い目をしてよひか」と一度にどっとぞお笑いある。)

平凡社『説経集』傍注も「失言で熱い目にあい結構か」とする。「熱い目をして-良いか？」の構文と見て、疑問と解しているか。しかし「熱い目をしてよいか？」の構文と見て、むしろ「口故に熱い目にあつても良いのか。(いや良くない)」という反語と解される。持ちかける気持ちがより強い反語とする方が、より臨場感のある語り口と解されよう。

以上

[依拠本文]

横山重 編『説経正本集』全3冊(角川書店、1968年)使用本文は第1と第2に所収。

[注釈書]

荒木繁・山本吉左右 編注『説経節』(平凡社東洋文庫、1973年)  
室木弥太郎 校注『説経集』(新潮日本古典集成、1977年)

信多純一・阪口弘之 校注『古浄瑠璃 説経集』(岩波新日本古典文学大系、1999年)(担当：信多純一「をぐり」、阪口弘之「かかるかや」「さんせう太夫」)

[研究書・論文・参考]

室木弥太郎『増訂 語り物(舞・説経・古浄瑠璃)の研究』(風間書房、1970年初版・1981年増訂)

荒木繁(1973)：「解説・解題」(前記『説経節』所収)

山本吉左右(1973)：「説経節の語り」と構造」(前記『説経節』所収)

室木弥太郎(1977)：「解説」(前記『説経集』所収)

信多純一(1999)：「近世初期の語り物」(前記『古浄瑠璃 説経集』所収)

柏原卓(1988)：「説経しんとく丸語釈ーてに、術計尽き等ー」(『和歌山大学教育学部紀要・人文』37集所収)

柏原卓(1989)：「佐渡七太夫正本「さんせう太夫」の詞章の性格」(『奥村三雄教授退官記念・国語学論叢』桜楓社刊 所収)

柏原卓(1990)：「説経さんせう太夫語釈」(『和歌山大学教育学部紀要・人文』39集所収)

柏原卓(1996)：「説経かるかや語釈」(『きのくに国文』4号和歌山大学 所収)

柏原卓(2004)：「紀州関連の古説経に見える文体特徴」(『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』24号所収)

※本稿は、第56回中部日本・日本語学研究会での発表をもとに加筆した。当日の貴重なご意見に感謝申し上げます。